

話 題

気を付けよう！海のキケン生物

四方を海に囲まれた沖縄県には、様々な海の生物が生息しており、これらの生物の中には毒を持つ危険な生物もいます。「危険生物」という言葉はあくまでも人間中心のもので、これらの生物が刺したり、咬んだり、毒を持ったりするのは、自分自身を外敵から守ったり、餌を取るためなどの生きる戦略なのです。

そのため、我々は海の危険生物に対する正しい知識を身に付けるとともに、被害にあった場合の備えを行うなど、注意することが大切です。

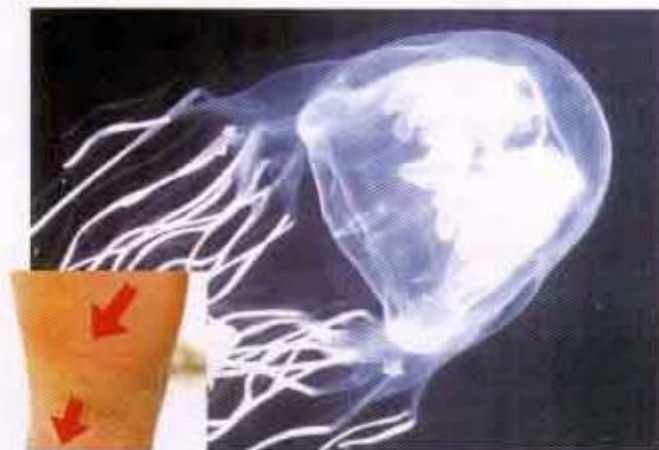
1 平成10年の被害状況

平成10年（1～12月）に関係機関から報告のあった海洋危険生物による刺咬症事故の総数は239例で、男性142人（59.4%）、女性96人（40.2%）、不明が1人（0.4%）で男性が多いです。年齢別では10歳代が最も多く85人、次いで20歳代の56人、10歳未満38人、30歳代30人、40歳代14人、50歳代以上13人、不明3人でした。

2 ハブクラゲによる刺症事故の概要

(1) 被害発生状況

平成元年から平成10年までに延べ703人のハブクラゲ被害の報告があり、その内、3人が死亡しています。ハブクラゲによる被害は夏場に発生しています。



ハブクラゲに刺された直後

ハブクラゲ

平成10年のハブクラゲによる刺症事故には、7月に石垣市で発生した女の死亡事例が含まれています。被害者総数157人中、男性84人（53.5%）、女性72人（45.9%）、不明1人（0.6%）であり、年齢別では10代以下が97人と最も多く、全体の6割程度を占めていました。

(2) 地域別刺症事故数

平成10年のハブクラゲによる刺症事故報告のう

ち、地域別発生状況では八重山地域が最も多く50人、次いで南部地域42人、中部地域35人、北部地域39人、宮古地域12人、不明が1人でした。

さらに、市町村別では、石垣市の42人、次いで糸満市22人、那覇市16人、宜野湾市、恩納村で12人、平良市11人、竹富町8人の順でした。

県内在住者が108人（68.8%）、県外在住者が42人（26.8%）、不明が7人（4.5%）で、刺症事故発生時の被害者の行動は水泳中が最も多く全体の87.3%を占めていました。

3 万一、被害に遭ったら

応急処置が危険生物の種類によって異なりますので、その点を考慮に入れて対処しなければなりません。万一、呼吸や心臓が止まった場合は、すぐに人工呼吸、心臓マッサージを行なうとともに、早急に医療機関へ搬送して下さい。

ハブクラゲ

- ① さされた部分は絶対にこすらないこと。
- ② 酢（食酢）を患部にかける。
- ③ 触手を手ですみやかに取り除く。
- ④ 患部を氷や冷水で（ビニール袋などに入れて）冷やす。

ウンパチイソギンチャク

酢は使わずに、海水で洗い流し、氷や冷水で冷やす。



ウンパチイソギンチャク

ヒョウモンダコ

毒を絞り出し、医療機関へ搬送するが、毒を飲み込むと危険ですので、口では絶対に吸い出さないで下さい。

アンボイナガイ、イモガイ、ウミヘビ

毒を口で吸い出しながら、医療機関へ搬送する。

オコゼ、カサゴ類、ゴンズイ、オニヒトデ、ガンガゼ

目にみえる大きな棘は取り除き、40～45℃（やけど等をしない程度）のお湯につけ、必要なら医療機関へ搬送する。

（衛生動物室）